

創造的表現の開発 5

—子どもたちの個性的な自立をめざして—

登 浩 二

1 教育内容のスリム化を考えると

小学校の「音楽」がなくなるのではないか。昨年夏あたりから公立小学校の先生方からそうしたことを尋ねられることが増えて来た。昨年夏、教育課程審議会が9年ぶりに再開し、教育内容の見直しを始めた。その動きの中で、授業時間削減だけではなく他教科との統合までも話題に上って来ている。

平成8年7月に出た第15期中央教育審議会の答申の「教育内容の厳選の視点」という一項で、「全体として授業時間の縮減」が必要であると、例の一つに「音楽における各種の奏法、美術における各種の表現方法、技術・家庭科における電気製品の仕組みや各種の被服製作など、学校外活動や将来の社会生活で身につけることが適当な内容の精選を図る」とある。これは中学校を対象としているが、小学校においても基本的にはこうした視点から、教育内容のスリム化の検討がなされるのではあるまいか。それと同時に、小学校音楽の教育内容のスリム化の問題は、生涯学習の視点からも検討して行くことが重要であると考え。それは音楽とは、個人の感じ方・味わい方といった非常に個性的な部分に焦点をあてる教科であり、到達目標を一律に決定することが不可能な教科であるからである。これは図工科においても共通する部分である。教育課程審議会委員の坂元日弘直・国立博物館館長の「音楽と図工は統合して芸術科にしたら」（日本教育新聞—平成8年9月7日付）発言の背景はこの辺りにあるのではないかと推測できるであろう。

このような社会の流れの中で、スリム化された新しい音楽教育を考えると、音楽とは何か、音楽をなぜ行うのか、音楽教育とは人間にとってどういう意味があるのかについて見つめ直す必要が感じられる。本校では教育内容のスリム化のための視点として「自立」という観点から研究を進めて行くことになった。このキーワードを手がかりとして、これより考察を進めたい。

2 なぜ今、自立が求められるのか

これまでの音楽科の学習指導の実際において、音楽の「美しさ・楽しさ・よさ」を「感じる・味わう」ことをねらいとして学習が進められる傾向が見られた。そしてその究極の目的は「音楽を好きにさせること」ではなかったかと考えられる。それは、新しい学力観が文部省より示された時点で確固たるものとなったように感じられる。

そうした変化は、それまでの音楽教育が音楽的な表現そのものに「達成感・満足感」を得させるために、その技術の習得のための教え込みや、教師の音楽的意図を子どもに押し付けるなどといった、画一的な指導法に対する批判が、新しい学力観の中で痛烈になされていたことが、一つのきっかけとなったのではないかと考える。

しかし、このことは「技術を教えてはならない。子どもが気づくまで待たなくてはならない」といった誤った考え方も現場に生じさせた。わたしはこうした現象に疑問を感じざるをえなかった。それは、芸能科の一分野である音楽科において表現技術のよさ・すばらしさを教え伝えなくしてどうして、豊かな感性や芸能を愛好し尊重する態度が、子どもたちに育まれることができるであろうかと考えているからである。確かに音楽の美しさや楽しさやよさを感じ味わうことができる子どもたちを育むことは音楽教育の究極の目的の一つであり、そのことには共感している。しかしそのための手掛かりを何も与えることなしに「感じなさい、味わいなさい」といわれても子どもたちは困惑するばかりではあるまいか。しかもその姿から「いまの子どもたちは自分から動こうとはしない。

だれかに何かをしてもらうのをじっと待っているようだ。ひ弱で主体性がない」と評価され議論がなされているとすれば、これはいかなるものであるかと思う。

こうした学習指導の問題は、教師が音楽の美しさや楽しさやよさを感じ味わうとは具体的に、子どもたちがどのような状態になるのかについてのイメージングが欠けていることにその原因があるように感じられてならない。こうした心情的・情意的な学習指導目標を設定する場合、極力子どもたちの具体的な姿について「～している。」といったイメージを明確に教師がもち、学習が進むにしたがってそれが系列化されていくように配慮する努力がさらに求められるのではないかと考える。

すなわち、これまでの観念的な現実からまず教師が自立すること、自立はまず教師の問題としてとらえたいと考えるのである。

そして、子どもたちの自立については、教育哲学者ヒルケーの言葉「教育とは卒業後の思い出なり」に手掛かりを得たい。つまり「学校で習ったことを、卒業してすべて忘れてしまっても、なおかつ頭や体や心に残っていること、それが教育である」ということである。さらにスリム化の観点からは生涯教育に焦点を当てたい。そしてそれらを融合させまとめると、「学校を卒業した子どもたちが、一人ひとりの興味関心に応じて、自分が好きな音楽を自ら求め見いだしていけるようなこだわりを育むことを通して、芸能のよさを感じられるような資質や能力を育むこと」ができることを目標に、改善の方向を模索したい。

3 これからの音楽教育へ向けての一つの提案

平成5年度に福岡県で開かれた文部省の教育課程運営改善講座のパネルディスカッションにおいて、パネラーの一人が、「私はたとえば発達段階という考え方も、すべてゴミ箱へ捨ててしまって教育課程そのものを白紙から考え直すといった大胆さがこれからの考えるときにどうしても必要だと思います」と発言したのを会場で聞いて共感した。これまでも教育課程の改訂は常に精選の方向で審議が続けられて来た。しかし、どの教科のどの部分を削るかといった、具体的な審議にはいとどの教科もそれぞれの主張を持ち、思い切ったことができにくい状況が存在した。しかし今回は学校完全五日制による総授業数の削減と時代の新たな変化に対応する内容を盛り込むことは必須の課題である。そのために、社会教育に対応を求められるものや差し迫っての必然性がないと考えられるものなどを、本校の現行の音楽科の教育課程の中からどんどん削除して行く作業を試験的に試みた。その作業の結果最後まで捨て切れずに残ったものは「聴いて感じたことを表現する能力」であった。これは具体的には「子どもたちが音楽を聴いて、心の中に描いた思いやイメージを実際の音に表し、自分の気持ちに合うように工夫して行く姿」と言い換えられる。

それでは、このように子どもたちが音楽と積極的にかかわり、そこに自分なりの新しい課題を発見しその解決や実現に向けて主体的・創造的に取り組めるようにするためにはどのような学習の場が設定されるべきであろうか。私は次の5つの場をイメージした。

- 教師と子どもたち一人ひとりが向き合う場
- 子どもたちが自分のよさや可能性を発揮できる場
- 自分の気づきや考えのよさ、他の友だちの気づきや考えのよさを感じ合える場
- 表現する喜びを味わう場
- 創造的に活動を進める場

そして、こうしたそれぞれの場において、子ども一人ひとりが自分のよさを十分に発揮するような豊かなかわり方を教師は工夫するとともに、それぞれの場における子どもたちの具体的な姿をイメージしておくことが重要であろう。

4 指導の実際

(1) 学年 第2学年2組(男子18名 女子19名 計37名)

(2) 題材 ようすを おもいうかべて

夕やけ こやけ(中村雨紅作詞 草川信作曲)

(3) 題材について

歌を歌うということは、子どもたちが自分の気持ちを素直に表わしたり、友達と心を通い合わせたりするために欠かすことのできない表現活動である。その場合、曲想をどのように感じ取って表現するかは、音楽の質を決定する重要な要素となってくる。曲想はその楽曲に対するイメージとも言えるもので、そのイメージを音に表していくことが曲想表現の工夫とつながってくる。本題材では曲想表現のてがかりの一つを情景を想像することにもとめ、歌の気持ちに合った歌い方の工夫をする学習を通して、音楽に対するイメージを広げることをねらいとしている。

児童はこれまで、生活の中に音楽があり音楽の中に生活がありたいという学級担任としての願いから行事の歌・集会の歌・一日の歌・四季の歌・日本民謡・外国語の歌・世界民謡・国歌・クラシックの名曲・詩吟など年間百曲程度の歌と親しむ活動を続けてきている。その中で児童は、歌うことを楽しむ経験は積み重ねているが、音楽に対するイメージを持ちそれを表現に生かしていくという学習は未経験といってよい段階にある。本題材においては、歌詞の表す情景を想像しながら、友達と声をそろえて歌う活動を経験することにより、自己表現の幅を広げようとする意欲を育みたい。

(4) 指導目標

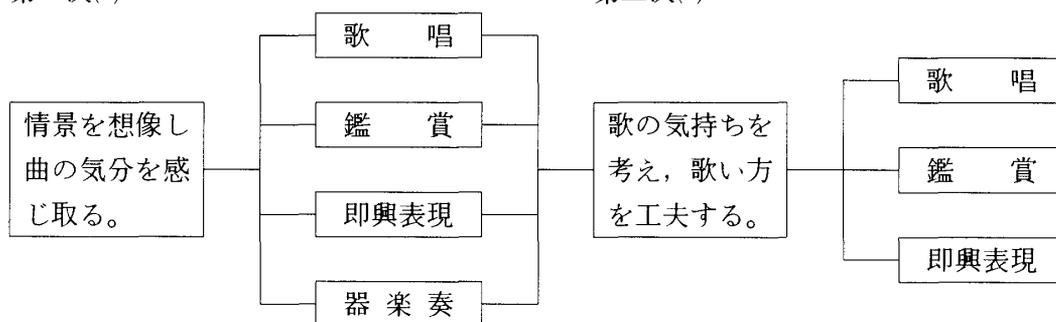
① 歌詞の表す情景を想像して、歌の気持ちに合った歌い方を工夫できるようにする。

② 曲想を感じ取ったり、表現の工夫について考えたりしながら聴くことができるようにする。

(5) 指導内容と計画……………8時間(本時 第二次 第2時)

第一次(3)

第二次(5)



(6) 授業設計の焦点

子どもたちが友達と一緒に音楽にかかわる活動では、それぞれが興味を深めた音や響きを即興的に合わせてその効果を聴いたり、あるいは一つの旋律を一緒に口ずさんで心が通い合うのを楽しんだりしている姿を見ることができる。そこでは、互いによさを出し合いながらより豊かな音楽の世界を感じ取ろうとしたり、友達の表現のよさに共感したり認めたりする姿が見られる。このような音を合わせる楽しみ、互いに聴き合う楽しみ、そしてともに一つの表現をつくり上げる楽しみは、音楽のもつ重要な特性の一つである。そこには、音楽のよさや美しさを感じ取る力、つまり鑑賞の態度や能力が働いている。そのようなことから、本時においては歌詞の表す情景を想像したり、工夫した表現を聴き合う場を設定したり、子どもたちが一つの目的に向かってともに活動を進めることができるような支援の在り方を工夫したりすることにより、歌の気持ちに対する自分のイメージを深めていけるようにしたい。

仮説	歌詞の表す情景を想像したり、工夫した表現を聴き合う活動を通して自分たちの表現を振り返るならば、歌の気持ちに対する自分のイメージを深めることができるであろう。
----	--

(7) 本時の目標

「夕やけこやけ」の歌の気持ちに対する自分のイメージを深めることができる。

(8) 準備

範唱CD, CDデッキ, 録音用マイクroフォン, 録音用カセットテープ, 歌詞カード, 気づきメモ

(9) 評価の観点

音楽への関心, 意欲, 態度	進んで聴き, 進んで歌おうとしている。
音楽的な感受や表現の工夫	聴いて感じたことを, 表現に生かそうとしている。
表現の技能	歌の気持ちを感じて歌っている。
鑑賞の能力	歌の気持ちを感じて聴いている。

(10) 学習の展開

学 習 活 動	指 導 ・ 支 援 活 動
1 今月の歌「広い世界へ」を歌う。	1 しっかりと声を出すことにより, 音楽の学習の始まりを感じられるようにする。授業の始まりに毎時間位置づける。 ・楽譜上の発想記号を感じて表現できるように促す。 ・拍感を捉えられるようにするために, 必要に応じて拍数を数える。
2 歌詞カードを見ながら, 歌詞の表す情景を想像する。	2 自分の体験に照らし合わせながら, 歌詞の表す情景を想像できるようにする。そのために下記の支援活動を計画する。 ・歌詞カードを準備する。 ◎歌詞の表す情景を想像できるような言葉かけをする。 ・必要に応じて動作化を取り入れる。
3 前時の「夕やけこやけ」の録音を聴くことにより, 自分たちの表現について振り返り, 本時のめあてをつくる。	3 ◎個々が感じている歌のイメージに照らし合わせて前時の表現がどうであるかについて評価できるようにする。 評価項目は次のようなものが予想される。 ・歌詞の表す情景について。 ・曲の山を意識した表現について。 ・旋律の動きにあった表現について。 ◎子どもの評価を気づきメモに書き込み歌詞カードに貼り付けることにより整理する。
4 めあてを確認し, 曲想表現をする。	4 気づきメモにより本時のめあてを確認しながら曲想が表現できるようにする。 そのために下記の支援活動を計画する。 ◎一人ひとりの声を聴き評価する。 ・必要に応じて伴奏や指揮をする。 ・表現を録音し, 音声を記録する。 ・必要に応じて範唱CDを聴く場を設定する。
5 本時の学習を振り返る。	5 録音したテープを聴くことにより, 本時の表現を振り返り, 今後の学習課題について考える場を設定する。

(1) 授業記録

[授業研究] (平成8年11月25日)

時間	教師の支援活動	児童の反応
9:45	<p>「広い世界へ」行こうかね。最初は強く始まるか、弱く始めるか。どんな印がある？</p> <p>じゃあ、このぐらいの強さ？ (ピアノ伴奏で音量を示す。)</p> <p>(歌の途中で)</p> <p>はい、ピアノ(伴奏の音量を下げる) はい、メゾフォルテ(伴奏の音量を上げる)</p> <p>メゾフォルテとメゾピアノのちがいは今日はよく出てたね 歌の玉手箱をしまってください。 号令</p> <p>さあ、これまで「夕やけこやけ」について勉強してきたけど、2の1の友だちがいろいろなことを言ってくれたね。どんなことを言ってくれたかね？</p> <p>言葉がよく分からないといけないね。 今日は詩を勉強したいと思います。 作詞って何だろう？作曲者は知ってるよね。</p> <p>歌を読んでみよう。 はい、そこまで。 いつ頃夕やけになる？4時半、5時、5時から5時半 「夕やけ」(大きく読む)と「夕やけ」(小さく)みんなの夕やけはどっちがいい？ 日が暮れる。だんだんあたりはどうなる？ ここはどこ？町なんですか、いなかなんですか？ お寺はどこにある？ お寺の何がなる？ どんな音？ カラコロンじゃないよね。いろんな音があるけど、お寺の鐘よ。しかも山よ。どうぞ。 さあ、どうして手をつないでかえるの？ちょっと手をつないでみようか、日をつむって。</p> <p>今日はいのこりできる、うれしいなあ。日が暮れるのが早いよだな。あとみんな帰った。先生もいない。学校中だれもいない。ふと見たら友だちがいた。友だちと手をつないで。ひとりぼっちじゃないね。 絵を見て、何人ぐらい？ いなくて少ないよね。 昔のいなかのようす。車も通ってない。 まだ、電気もきていない。 だれと一緒に帰ろうとしているのかな。 空を見ると何かが飛んでる。 からすさんはどこに帰るのかな。 だれが待っているのかな。子どもかな。 おなかがすくね</p>	<p>メゾフォルテ フォルテもあるよ</p> <p>「広い世界へ」を歌う (楽譜を見ながら座って歌っている) [ルールールー……]</p> <p>号令</p> <p>「からす」が「わらす」とか「たらす」にきこえる</p> <p>うたのことば</p> <p>「夕やけこやけで日がくれて」</p> <p>真っ暗になる。太陽が落ちて暗くなる いなか 山 かね ポーン カーン ドーン 一斉にゴーン ドーン</p> <p>おててつないでみなかえろう (手をつなぐ動作)うれしい</p> <p>かなしい</p> <p>いなかじゃけ少ない いなかもんじゃけ5人、3人 大人がいないからうれしい</p> <p>からす からすの家 おかあさん おかあさんにご飯をつくってもらってる</p>
9:56	<p>さあ、それじゃあ歌ってみようか。 座って歌うときはどうしますか？</p> <p>(ピアノ伴奏する)</p> <p>今歌いながら、夕やけが浮かんだ人がいますか？</p> <p>この前の歌を聴いてみよう。今日はどういう勉強をしようかな。</p>	<p>(いすに浅く座り、姿勢を正す)</p> <p>「夕やけこやけ」1番を歌う</p> <p>数名挙手 全然浮かんでこん</p>
9:58	<p>(テープをかける)</p> <p>30秒、日をつむって今日の勉強のめあてをつくって下さい。 はいそれでは、あーすばらしい、これで完璧だと思った人いや、もうすこしこんなに歌ったらいいという人。</p> <p>こういう風にやったらできるとやってくれる人？ ああいなか…。そろえたらいい？息つぎの問題かな？前やったよね、ちょっとやってみようか。</p>	<p>(静かに聴いている)</p> <p>「夕やけ…」はよかったけど、「山のお寺の…」がぼらぼらになっていた</p>
10:02	<p>(息つぎのところをオーバーにやってみせる)</p> <p>息つぎの問題か。他は？</p>	<p>(息つぎに気をつけて一回歌う) 今ので納得 息つぎが分かった 「かねがなる」の「る」が遅く言った人と速く言った人で、「るる」となっていた</p>

10:04	<p>様子に関する事ではない？ じゃあ、もう一回聴いてみようか。 今度は様子。</p>	<p>(挙手なし) (もう一度テープを聴く) 「ひがくれて」だから、だんだん小さくしたらしい。 ピアノにしたらしい。</p>
	<p>じゃあ、先生がピアノでやってみよう。 (ピアノで弾いて聴かせる) こんな感じ？ 前にTさんが言ってくれた「からすと一緒に帰らしましょう」 のところをゆっくりするというのと同じだな。 他に小さくした方がいいというところがあるかな？</p>	<p>(Kさん、うなづく) 似ているけどちがう 「山のお寺の鐘が鳴る」</p>
10:07	<p>山のところをだんだん大きくしていく、真ん中をふくらませ せていく、盛り上げるということか。 一人で歌ってみて。</p>	<p>(何人かが歌ってみる)。 W君「山のお寺の鐘が鳴る」(手振りをつけて歌う) 大きく 小さく</p>
	<p>というのがW君の歌。じゃあ、この3つ。息つぎ、ふくら ませていくところ、小さくしていくところ、「おててつな いで」のところをふくらませてみよう。 手をつないでみよう。 つないだらどんな気持ちになる？ やっぱりぶらんぶらんしたくなるね。夕やけこやけだから ゆっくりになるね。</p>	<p>(手をつなぐ) (手をつないでふる) (手をつないだまま「おててつないで……」を歌う)</p>
	<p>それでは演奏隊形になりましょう。 静かだ。どうい音がいいかが分かってきたね。とでもう れしいよ。 録音してみる？</p>	<p>(ステージに静かに移動し並ぶ) まだー。したいー。 「夕やけこやけ」を1番を1回歌う</p>
10:10	<p>じゃあ、発声練習 最後に鐘がなった(ピアノ伴奏の最後に低音を響かせる) 気づきがある？ 何羽飛んでいるのかな？ 何羽もどわーといっているのかな？ 自分のテレビで見て 大きく歌うとからすが？ 小さく歌うと？</p>	<p>H君「からす」が強すぎた いなかだからたくさんいる たくさん 1匹 (「からす」のところを全員で歌う) (教師の合図で一人一人「からす」を歌っていく)</p>
10:14	<p>みんなのからすさんは何匹？せーの (一人一人の「からす」の声を聞き評価していく) ああ、いいねえ ちょっと「わらす」に聞こえたよ 元気のいいからすだ 女の子がいいねえ 男の子とちがうね、大きさとか しっかり口が開いてていいね 今の声みんなだまねしてごらん よく聴いてたねえ せえの</p>	<p>全員で「からす」 「からす」 「からす」 「からす」 「からす」 「からす」 「からす」 全員で「からす」 「からす」</p>
10:17	<p>(全員に向けて)さんはい じゃあ、録音しますよ。 はい、座って。 (録音したテープを流す)</p>	<p>「からすといっしょに帰らしましょう」 全員で「夕やけこやけ」1番を歌う (自分の席にもどる) (録音した自分たちの歌を聴く)</p>
10:20	<p>鳥肌が立った。この前の前の音楽朝会以来じゃ。 気づきがあったら教えてくれる？ 言葉はこれからも勉強していこう。いいところは？ 息つぎがバラバラだったのがそろってよくなった。 つぎの時間は何を勉強しようか？ はっきりもいろいろあるな 「あいうえお」(口形)とか前やったて 「うーあけ」(口を開けずに「夕やけ」を発音)いうて前 先生やったよね 分かりました。つぎの時間は、口を大きく開けてはっきり させて歌う、まちがえないように歌う、他にもこうしたら いいんじゃないかということ勉強しましょう。</p>	<p>まだ「たらす」に聞こえる いいところは、前までは「帰らましょ」とすぐ止めていた ところがよくなった 出だしがきれいになった はっきり声に出して歌を歌う 口を大きく開ける 口を大きく開けて発音をよくして元気よく歌う まちがえずに歌う。息つぎとか言葉 これで2時間目の音楽を終わります</p>

5 考 察（授業仮説に照らし合わせて検証）

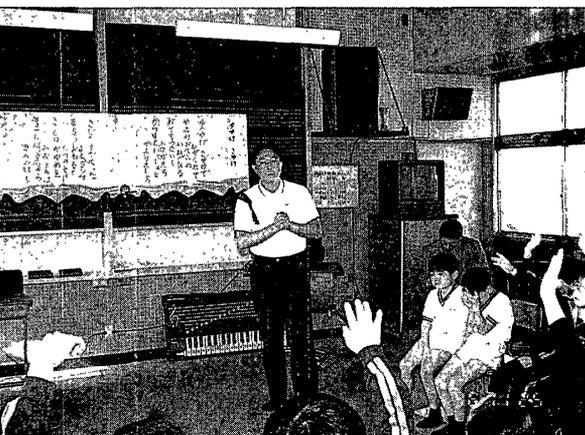
(1) 歌詞の表す情景を想像するための教師の支援は十分であったか。

指導案には、教師の指導・支援活動として

- 歌詞カードの提示
- 情景を想像できるような言葉かけ
- 動作化を取り入れること

が計画されていた。歌詞カードを提示することによって、子どもの意識が歌詞の方へ向けられていたという点で歌詞カードは有効であったと言える。また、情景を想像しやすくするための挿絵もイメージ化のためには有効なものであったと考えられる。続いて、情景を想像できる

ような言葉かけとしては、子どもたちの日々の生活の中から歌詞の表す内容を実感できるような言葉を選んだ。例えば、「夕やけの空をみたことあるかな」「何時頃だった」「その時に何をしていたの」「どんなところで見たの」「どう思った」「どんな色だった」「回りにだれかいたの」などである。このようにして問いかけを繰り返すうちに、子どもたちの頭の中に夕やけに対するイメージがゆっくり形成されていったように思う。それは、最初は声を張り上げて歌っていた子どもたちがだんだん優しく柔らかい声で「夕やけこやけで日がくれて～」と歌い始めたことから伺える。



この場における教師の支援活動について、授業をご参観いただいた野村幸治先生（広島大学学校教育学部教授・音楽教育学）から、次のような批評をいただいた。

- 「夕やけこやけの歌詞の内容と今の子どもたちの生活がかけ離れていて、歌詞の表す情景を思い浮かべることが難しいのでは」ということについてだが確かに夕焼けそのものの体験が昔と今では異なるという生活実態がある。しかし、昔に帰れというのではなく自分の体験を手がかりとして、自分の今の世界に引き寄せて歌えるようにすることが大事である。自分の生活を掘り起こしながら、一方では作詞者と作曲家との思いの接点を見つけながら、自分たちの歌にしていけばよい。

- 教師は「音楽技術は間違えてもいい、でも心は間違えてはいけない」という信念を持ち、「心を込めてこの歌を歌おう」というめあてを明確にしたい。例えば、「～からすといっしょにかえりましょう」の最後の音を子どもたちはのぼそうとしていた。これは決して楽譜どおりではない。しかし、子どもたちが情景を感じ始め自分たちなりのこだわりをもって表現し始めている場面であった。ここで、「ああ、夕やけを見ていたんだね」などの言葉かけから楽譜上にはない子どもの発見を評価し、「歌は正しく間違えずにではなく心だ」ということについて気づき、さらに学習を深められる場になり得たかもしれない。



この場において教師は、山里の夕焼けをイメージしていたが、そのイメージを子どもに押し付ける言葉かけとなっていないかについて反省したい。例えば同じ夕焼けの光景でも海に広がる夕焼けと山里の夕焼けの情景は全く違うはずで、海に臨む山の高台にあるお寺の鐘の音と、山里の山峡にこだまする鐘の音とは響きや重みが異質なものであろう。クラス全員で斉唱して行く場合、こうした個々のイメージをどのような過程を経て共通のイメージへとふくらませていくかが重要となってくる。



これは、図工科で言えば、個人制作と共同制作の問題になってくる。図工科では、どちらの場合においてもまず、制作にあたる個人個人がしっかりと自分なりのイメージを持つこと。そして、共同制作の場合は自分なりのイメージをしっかりと出し合うこと。そして、共同制作のめあてをしっかりと確認すること。最後にしっかりと話し合って共通イメージをもつこと、これらを自立ととらえる方向で研究が進んでいる。音楽科においても自立のコンセプトについて

は、図工科と同様にとらえている。

動作化については、本時の学習から有効な指導・支援活動となりえたかを分析することは不可能であった。こうした学習を積み重ねることによりゆるやかに結果が生じてくるものと思われる。

以上のことより、歌詞の表す情景を想像するための教師の支援は十分であったかについて、有効性は認められるものの十分であったとは言えないという分析結果となる。

(2) 工夫した表現を聴き合う場の設定は適切であったか。

本時では、3つの聴き合う場が設定された。

① 前時の録音テープを聴く場（学習活動3の冒頭）

本校には第2学年に2クラスの普通学級（2年1組・2年2組）が置かれており、同じ進度で同じ題材を学習している。私はその両方のクラスの音楽の授業を担当しているので歌唱教材を扱うときには、1組には2組の歌声を、2組には1組の歌声をとるように録音したテープを聴き合ってもらい、その評価を子どもたちに任せるという学習を積み重ねている。前々時の録音テープを1組の子どもたちに聴いて評価を任せたと「きれいだ、何を歌っているのか言葉がわかりにくい」という気づきが出された。

そこで前時は、情景の想像とともに言葉をはっきり発音するというめあてのもとに学習を進めた。前時の録音テープでは、息継ぎがばらばらという気づきが1組の子どもたちから出された。そこで本時ではそのことを伝えるとともにもう一度前時の録音テープを聴く場を設定した。その結果「息継ぎするところを決めよう」さらに「何となく全部同じ感じで歌っているので、『やーまのおてらのかねがなる』のところはふくらませて歌おう」「最後の『からすといっしょにかえりましょう』のところは消えて行くように歌おう」という気づきが子どもたちから出された。この場について、野村先生より、次のよう



- 「山のお寺の鐘が鳴る」のところは「ほんとうにふくらまして歌えたかな」と子どもたちが気づ

き、満足するまでチャレンジさせたかった。自立とは待つことが基本である。しかし、子どもが低い次元に満足しているとき、「ここまで来ている、でもこれでいいの、もっとチャレンジしてみよう」という次の次元をねらわせる手だてが必要ではないか。高音をぐっと伸ばすところは、子どもたちは何も意識せずに歌っていたが、「今は高い声はでないけれど、いつかきっと出すぞ」といった、子どもたちが自ら、技術的な高まりを意識して歌えるようにしていきたい。

② 「からすといっしょに」のフレーズを一人ひとりが歌い聴き合う場（学習活動4の中盤）

この場は教師が、一人ひとりの歌声を一对一で聴く場で極力毎時間5分程度取るようにしている。そして、順番を待つ子どもたちも他の子どもたちの歌声をじっと聴いている。本時では「からすといっしょに」の部分ピックアップし（課題とし）一人ひとりの歌声を聴いた。課題は教師が与える時と子どもたちから出される場合とがある。

本時において、教師は言葉についての前時の学習の定着を評価するとともに、どのようなカラスをイメージしているのか、個々のイメージをもとに表現しあい、聴き合う場を持つことをねらいとしていた。一人ひとりの表現を聴き合い感じ合う学習の積み重ねは、自分のよさを知るとともに他の子どもたちのよさを知るという点において、自立のための有効な手だてとなりえるのではないかと予想しているが、この点についてはさらに今後の授業の積み重ねの中より検証していきたい。



③ 本時の録音テープを聴く場（学習活動5の冒頭）

ここでは、本時のまとめとして全員で「夕やけこやけ」を斉唱して録音し、聴き返すことにより学習のめあてに照らし合わせて振り返る場である。

本時では、「息継ぎ・ふくらませて・きえるように」の3つの観点が子どもたちから出されたがこれらの観点に対する子どもたちの評価は「前よりよくなった」「うまくできた」であった。さらに次時のめあてについては「もう一度、息継ぎとか言葉について、完ぺきにしたい」「何回も歌って練習したい」「間違えずに正しく歌いたい」という意見が出された。



この場において様子を思い浮かべて歌っているかどうかを、録音テープにより振り返ることが適切であったかについては疑問が残る。この点については、さらによりよい方法を模索したい。そして、子どもたちからも出された通り授業全体を通じて、子どもの表現の場が少なかった。もっと一つ一つのニュアンスのちがいが比べられるように、何回も歌う時間をとった方が

よかった。音楽は感じ取ったことを音楽で表現するところが、国語とちがう点であることを明確に意識するべきであった。

以上のことより、工夫した表現を聴き合う場の設定は適切であったかについて、場の設定そのものの有効性は認められるものの、場の設定の仕方や時間配分については表現の時間を確保するという点において、さらに検討が必要という分析結果となる。

(3) 歌の気持ちに対する自分のイメージをふくらませることができたか。

(1)(2)の検証をもとに分析すると、本時において、教師が示す手がかりや支援活動によって、子ど

もたちは歌詞の表す情景についてのイメージをふくらませつつあると言える。そして、自分たちなりの願いやこだわりを発揮させながら、進んで音楽の学習に取り組んで行こうとする意欲が感じられる。しかし、学習活動5において「間違えずに正しく歌いたい」という技術面のめあてが出たことは、教師が概念的に授業を進めていたことを伺わせる。この点について野村先生から次のようなご批評をいただいた。

- 教師が概念的に授業を進めてしまったのは確かである。例えば、学習活動3のところ子ども



ちが情景を感じ始めて歌声が変わって来たが、まだまだ次元が低い。もっと歌詞に入り込み、曲のもつ情景が深まれば深まるほど、堂々と歌えるようになる。からだいっばい使って歌って、なおかつ静けさを表せるような歌声を望みたい。そして、技術はあとからついてくるものである。例えば、のどを開いて歌おうと言わなくても、曲の持つ情景を感じて心を込めて歌えるようになれば、自然とのどは開いて歌っているものである。

6 子どもたちの個性的な自立をめざして

「低学年で頭声的発声は必要か」という議論がある。私はナンセンスだと思う。それは、ある子にとっては必要であろうし、ある子にとっては必要なかろうし、個々の問題であると私は考えている。本来、知識や技能は、子どもたちが心豊かに、主体的、創造的に生きていくために役立ってこそ意味を持つものである。

そして音楽教育はこれから、たとえその名前を変えようとも、子どもたちが激しく変化しつつある現代社会をたくましく、そして心豊かに生きぬく力を支える源のひとつとして、いつまでも心の中に存在し続けるであろう。

私は本研究はすなわち、音楽を心の問題として常に考えて行くという、音楽教育の原点を再確認することではなかったかと考える。

21世紀はもう目の前まで来ている。電子通信システムの高度な発達、国境という概念を大きく変えて行くであろう。そういう時代に第一線で活躍する今の子どもたちが、環境・情報・



外国語など、新たな変化に対応できる態度と能力を培うための教育基盤作りをすることは最優先課題である。しかし、その一方で情操を育てるとはうんと無駄をすることであるという考えもまた真実であろう。失敗しあこがれを経験することなくして、情操の発達はあり得ないと述べる教育学者も少なくはない。

私も、子どもたちとともに子どもたちなりの思いや願いを受け止め、感じ続ける努力を日々継続し、夢を持って夢を託して新しい時代の人間観を探る試みを続けたい。 (本校教諭)